

私は「自分が先祖伝来の土地を守っていくしかない」と徐々に心を決めました。そして、ある日、父に希望を持たせたい一心から提案したのです。「どうせ農業をやるのなら、楽しみたいね。酒米を育てて、オリジナルの清酒を仕込んでもらおうよ」。父は「家の田んぼの米で造った酒か、夢のようだな」と楽しそうに繰り返しながら、医師の宣告より半年後に他界しました。桜花満開の美しい早朝の、静かな別れでした。葬儀直後の慌しさから、「今年は、酒米なんて無理かな」と私は弱気になっていました。すると、「皆で、館長の実家の田植えに行こうじゃないか」。上長尾の水田に利き酒講座の常連受講者ら二十人ほどが集まって、田植えに励んでくれたのです。名付けて「信州安曇野発！酒米栽培プロジェクト二〇〇九」。遺影の父も、皆の慣れない作業を、田の畦で見守っています。



「信州安曇野発！酒米栽培プロジェクト2009」

了。収穫した酒米・美山錦は精米歩合六十五%の白米に磨かれて、笹井酒造（松本市島内）の蔵へ運び込まれました。皆の期待を背負い、伝統的な製法にこだわって醸された純米酒は、その名も「寿一番星」。この十月一日（日本酒の日）、店頭に並びました。

「三郷の実家で農業をやろう」という私の突然の提案は、夫にとって晴天の霹靂だったことでしょう。定年退職して単身赴任先の東京生活を引き払い、松本駅に着いたその足で父の病室に向かって泊り込んでくれた夫。こうしている間も、私に代わって母の面倒までみてくれている夫には、どれだけ感謝をしても感謝し切れるものではありません。

記録的な暑さの夏が過ぎていきました。草取りに追われる日々は、年老いた両親がよくぞこれまで土地を守ってきたものだと思えて感じ入る機会となりました。高齢者の労力を頼りに、綱渡り状態で続いている日本の農業。その未来に思いを馳せながら、「食べる」という最も大切な営みに直接関わることでできる安曇野生活に期待をふくらませていきます。

夫の名刺の肩書きは、「農業倶楽部『千歳屋』主宰」。田畑を眺めながら仲間と酌み交わすために、倶楽部ハウスを建てました。軽トラックも購入して、車体に「信州安曇野・千歳屋」と入れました。どこかで見かけたら、お声をかけて下さいな。

（よしむら さちよ）

はなしの小窓

農業倶楽部「千歳屋」

松本市（上長尾出身） 吉村 幸代

現状を、何とか打破しなくては考えたので

寿台地区は松本市の東南部、牛伏川の形成した扇状地の上に開発された県下最大級のマンション団地です。高台にある新興住宅地から眺めおろす夜景には、故郷・安曇野の家々の光がきらきらと煌いて、まるで銀河のようです。

結婚を機に、生まれ育った旧三郷村上長尾から、この地に移り住んで三十年余。今年三十七歳になった寿台の町で、私は現在、八代目の地区公民館長を務めています。

平成二十年、館長に就任した私は、「二〇〇八年寿台公民館発！日本の伝統と文化を学ぶシリーズ」として、和太鼓入門講座や利き酒入門講座を開講することにしました。公民館の利用者に男性と若者が少ない

す。殊に、利き酒入門講座は老若男女、誰でもが共有できる楽しい学びの場になりそうな気がしました。

予感的中。利き酒講座は、地区内回覧が回り始めると二日で定員超の申し込みがある人気講座に育ちました。しかも、講座の中で口にした「オリジナル清酒を造りたい」という夢も、実現に向けて歩き始めたのです。

さて、公民館長になって初めての文化祭が無事に済み、やれやれと思った矢先の晩秋に、父が余命半年という宣告を受けました。入院生活を余儀なくされて病床で日を送りながら、父は自身の病のことよりも家屋敷や農地の行く末の方が気がかりでならない様子で、「千歳屋を守っていつてくれないか」と私に尋ねました。

千歳屋とは、私の実家の屋号です。



寿台地区敬老祝賀会で挨拶中の筆者

「家屋と庭園と農地をひとまとめに、現状のまま守り抜いて欲しい。それが最期の望みだ」と父は言い切りましたが、私は他家へ嫁いだ身、加えて農業の心得もなく、残念ながら父の期待に沿うことはできません。

ベッドに起き上がった父は、入院の十日前に観た寿台文化祭、その和太鼓入門講座のステージ発表の感動を熱っぽく語り、断言しました。「あれだけの太鼓連を立ち上げた人間なら、きっと何でも成し遂げられる」。